

芳香漂う

(昭和四十二年第六十回記念祭歌)

稲田雅久君 作歌
名田正信君 作曲

一

芳香漂うやわらかの
残んの春の夕間暮

朧にかかる夕月に

浮かぶ辛夷の花吹雪

ああ鳴り止みて聞えこぬ

色壮麗の鐘の音は

六十路の夏に鳴らざるや

いま黄昏の自治の庭

二

細き羽音も秘そやかの

蜉蝣闇をかすめゆき

奔る流れの音もなく

まつよい草の星あかり

ああ死に絶えて泳ぎこぬ

銀鱗おどる紅鮭は

六十路の秋に潮らずや

いま宵闇の自治の川

三

風に棚引く軽やか
雲蒼空の朝ぼらけ

よぎる秋津の影紅く

残んの月は薄れゆく

ああ舞い去りて渡りこぬ

長の旅寝の雁は

六十路の冬に還らずや

いま有明の自治の原

四

軒に麗なる銀の

垂氷に映る灯に

星影凍みる松が枝を

散るひとひらの雪の花

ああ枯れ果てて萌しこぬ

野も狭に埋もる花の実

六十路の春に咲かざるや

いま夜も更けぬ自治の舎

五

露に滴りぬ生々の
榆林にねむる夢醒めて

牧場におどる朝もやの

さなかに歌う夜明の鳥

見よ紅の山の端に

湧き立つ空の群雲を

つらぬきわたる光かな

いま六十歳の夜は明けぬ

六

寮友の顔に篝火の

炎もわらう記念祭

歌をうたわば玉響の

憂さも舞い飛ぶ火の粉なり

いざ高らかに祭歌

はやる太鼓の轟きは

夜空を深く駆け抜けて

北斗に和する生命なり